

モノクロームに光がさすとき。

善意の第三者

午前五時四十五分。薄暗い埋め立て地は冷たい朝霞とうっすら漂う排気ガスの匂いに包まれていた。

私がこの理解を越えた空間に放り出されたのは、バイクオタクである幼馴染の彩希のせいだ。「茜、絶対に面白いからついてきて！」と早朝四時に叩き起こされ、バイクの後ろに乗せられてきた結果である。

自分の気弱さが少し嫌になる。断れない自分の弱さ。それよりも彩希の強引さのほうが問題なのかもしれないけど。

少し背伸びをして周りを見渡した。空はまだ朝焼け前と言ってもいい空気だ。

部品交換会。初めて来たし初めて知った。バイクのパーツや本体だけでなく、それらに関係のない物までフリーマーケットのように並べられている。

その彩希なのだが、会場の入り口を抜け駐輪場にバイクを停めるやいなや「出遅れた、先に行ってる！」と叫んで短い髪を帽子に詰め込んでお宝探しに消えてしまった。

叩き起こして連れてきて、そして私を独りぼっちにする。彼女はホント自由で自分勝手だ。

残された私は一人ため息を原動力に会場を歩く。周りは油污れの染み付いた作業着や革ジャンを着込んだ強面のおじさんたちばかり。地面に敷かれたブルーシートには、金属パーツ、工具、用途の分からないメーター類が無造作に並んでいる。

すれ違う革ジャンの大人たちの好奇と不審の混ざった視線がちくちくと肌を刺した。なんだかごめんなさい、と心で唱えながら会場の端を歩く。

女子高生が休日の朝を過ごすにはあまりにも過酷で場違いな環境であり、私は完全に孤立していた。

所在のなさを誤魔化すように、私は首から提げた祖父の形見であるハーフサイズカメラを両手で包み込むように握りしめる。

最近シャツターが酷く重く、この場に馴染めない私の憂鬱な気分をそのまま体現しているようだった。

人混みを避けるようにして比較的空いている端のエリアに避難した。手持ち無沙汰にシ

ートに並んだ商品を見る。ガラクタの山に混じってレトロな看板や小物が並んでいた。よかった。ここなら多少は興味が持てそうだ。モノクロームの鉄屑たちが朝陽の逆光を浴びて不思議な陰影を作る。その光景にどこか美しさを感じ、私は少し離れてから無意識にカメラを構えてファインダーを覗き込んだ。

「それハーフサイズカメラですよ。ペンF？」

背後から不意に声を掛けられた。驚いて振り返ると、私より少し背の高い、同年代くらいの男の子と視線がぶつかった。

こんな場所に私以外の高校生がいること自体が想定外で、私は一瞬固まってしまった。

「あ、うん。おじいちゃんの形見なんだけど、最近シャッターが重くて」

戸惑いながらも正直に答えると、彼は「少し見てもいいですか」と丁寧な手つきで私のカメラを受け取った。

彼の指先には微かに黒い機械油が染み付いており、それが不思議とこの場所に馴染んでいる。

ファインダーを覗き込み、軽くダイヤルを回して巻き上げの感触を確かめた彼は、静かな声で言った。

「多分内部の古い潤滑油が固着しているだけです。無理に動かさずに分解して古い油を拭き取れば、また軽快に動くようになりますよ」

彼が機械への深い愛情を込めて話すものだから、私はすっかり感心してしまった。

「ありがとう、えっと、君はバイクの部品を探しに来たの？」

「はい。チャップリーのシートを今日こそは見つけたくて」

私の頭の中に疑問符が浮かぶ。

「チャップリーって、犬？」

私がきょとんとして尋ねると、彼は一瞬あっけにとられた後、今日初めて年相応のあどけない笑みを浮かべて吹き出した。

「犬じゃなくて、ヤマハの古い原付の名前です。小さくて可愛いバイクなんですけど、昔のバイクだからもう部品が手に入らないんですよ」

彼は困ったような、だけどそれが嬉しいような顔をして笑った。同級生たちが周りを気にしてSNSのタイムラインを見つめる中、彼は自分の興味のある過去の機械を見つめている。それがなんだか羨ましくて、少し格好良かった。

油まみれの指先で「いつか完璧に直して走るのが夢なんです」と嬉しそうに語る彼の姿を見てみると、ただ彩希に巻き込まれて退屈と孤独を感じていただけの私の心の中で、固着していた何かの歯車がカチリと音を立てて動き出したような気がした。

私たちはそのまま自然と二人で会場を歩き始めた。彼が探しているものや、手に入れたもの。そしてこの場所でのルール。色々なことを彼は教えてくれた。

「このカメラ、私にも直せるかな」

「大丈夫ですよ、結構シンプルな仕組みですから」

「やったことあるの？」

「はい。僕も父がカメラ好きだったんで。よかったら教えますよ」

他愛のない会話を交わす。あれだけ退屈だったこの場所が、少し楽しくなってきた。

そんな彼が急に立ち止まった。彼に少しぶつかってしまう。

「あった……初期型の純正シートだ。破れもない」

店先のブルーシートの端に置かれたシートを見つめる目は真剣そのものだった。しかし、養生テープの上に書かれた値段を見た瞬間、表情が曇った。

どうやら予算オーバーらしい。店主の初老の男性が「どうする兄ちゃん、買うのか買わないのか。悩むなら後ろの客に回すぞ」と煽りを掛ける。彼は諦めたようにシートから手を離そうとした。

その、機械油の染みた頼りない指先を見ていたら、胸の奥が痛んだ。

私の壊れかけたカメラに光を当ててくれた男の子だ。この人の夢がこのガラクタの海に埋もれていくのなんて見たくない。気づけば、私は自分の財布を開いていた。

「はい、これ」

「え……？」

驚いて顔を上げた彼の手のひらへ、養生テープに書かれていた金額分の紙幣をぎゅっと押し付ける。彼の温もりと冷たいお札の感触が指先で重なった。

「これ、カメラの修理代。……の、先払い。今度私のカメラを直してくれないかな」

驚いて目を見開く彼の背中を力強く叩いて前へ押し出すと、彼は一瞬躊躇したものの、やがて真っ直ぐな瞳で私に力強く頷き、店主に向かって「これ、僕が買います」とはっきり告げた。

念願の部品を手に入れた彼は、少し埃を被った古いシートをまるで宝物のように大切に胸に抱えて歩いていた。

気がつけば、いつの間にか会場を包んでいた冷たい朝靄は完全に晴れ渡り、空から降り注ぐ眩しい朝陽を、錆びた鉄屑たちが反射して輝いていた。

ポケットの中でスマートフォンが震える。彩希から「お宝の EXHIBITION のポストカードをゲット!」と誇らしげなメッセージが入っていた。それが、私たちの短くも濃密な時間の終わりを告げるチャイムだった。

「これ、僕の連絡先です。カメラ、絶対僕が直しますから」

少し慌てたように彼が差し出してきたスマートフォンの画面。そのQRコードを自分のスマートフォンで読み取る。画面に表示された彼の名前をそっと指でなぞってから、私は

顔を上げて微笑んだ。

「じゃあその時はチャッピーに乗ってきてね。そして君に直してもらったカメラで、一番に君のバイクを撮る。約束だ」

私はレンズキャップを嵌めたままの古いペンFを彼に向け、シャッターをカシヤリと切る真似をした。

ほんの数時間前までは、冷たくて場違いで息が詰まるほど灰色の街だった。

けれど今、モノクロームだった世界を彼の名前が表示されたスマホが照らしていた。

確かな温度をはらんだ特別な光が、まだ早いこの会場で輝いていた。

微かに漂う排気ガスの匂いも、今ではなんだか違って感じられた。

「あれ？ 茜、何かいいことあった？」

駐輪場で合流するなり、彩希が私の顔を覗き込んできた。どうやら無意識に口元が緩んでいたらしい。

「別に。何でもないよ」

「そっか。楽しかった？ 色んなものあったでしょ」

彩希はバイクにまたがってシートの後ろをぼんぼんと叩いた。それを合図に私はバイクにまたがる。

「うーん。私向きのものはあんまり無かったかな」

「そっか。だったら無理やり連れてきちゃってごめんね」

ヘルメットのシールド越しに彼女が申し訳なきように言った。だけど私は首を振る。

「ううん。来てよかったよ。……本当に」

「？ まあいいや、じゃあ帰るよ。しっかり掴まってね」

セルモーターが回り、お腹の底に響くような荒々しい排気音が早朝の空気へと溶けていった。

ふと彼が大切そうに語っていた「チャッピー」という小さくて可愛らしい響きが頭をよぎる。

そういえば、今私を乗せて唸りを上げているこの子にも、何か名前があるのだろうか。

「ねえ、彩希。このバイクなんて名前なの？」

私の期待に反してヘルメット越しの彩希が誇らしげに口にしたのは、全然かわいくない『スズメバチ』の名前だった。